

# 遠い国・近い国 PART2

開講日 2004年  
10月16・23・30日、11月6・13日 (毎週土曜日)

開講時間 10:40~12:00

主催/北海学園大学経済学部 後援/札幌市教育委員会  
[道民カレッジ指定・連携講座]

世界は狭くなったといわれます。ほんの少し昔に比べても、世界中どこにでもわずかな時間でいけるようになりました。でも、本当に世界は狭くなったのでしょうか？ 今や、インターネットで世界中の情報が居ながらにして入手できます。だが、情報を入手することと理解することは全く別の話です。今、求められているのはそれぞれの国や地域の経済や文化を理解することではないでしょうか？  
今年の経済学部公開講座の統一テーマは「遠い国・近い国」です。世界が狭くなったところか、まだまだ世の中は広いのです。情報がたやすく入手できるようになった今こそ、本当に世界の広さが実感できるのではないのでしょうか。

第1講/10月16日  
アメリカ大統領選挙と世界の行方

経済学部地域経済学科教授 野崎久和

第2講/10月23日  
「中国脅威論」をどう考えるか～東アジアの将来～

経済学部経済学科講師 越後 修

第3講/10月30日  
ロシアの都市とサハリン州の人々の生活と文化

経済学部地域経済学科教授 竹田正直

第4講/11月 6日  
ヨーロッパはどのように形成されたのか

経済学部地域経済学科教授 上村 仁

第5講/11月13日  
「アメリカニズム」という物語

経済学部経済学科教授 本城誠二

## 訃報

本年5月2日、本学部経営学科在籍の小池宏明君（3年生）が、病気のため逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。また後日にご遺族の訪問を受け、丁寧なる御礼とあわせて、本学学生の学業のために活用していただきたいと小池君の生前の預金を頂戴致しましたので、本学部では、経済学事典（伊東光晴編『岩波 現代経済学事典』）を購入の上、図書館に配架させていただくことになりました。小池君ならびにご遺族のお心遣いに感謝申し上げます。

# 大学では何が学べるの？ どんな先生がいるの？

## ホームページで学部情報を

既に皆さんが勉強したいというテーマを見つけているとしたらそれはとても幸運なことです。それを大学生のうちに見つけられたら二重の意味で幸運なことでしょう。（勉強や研究を進めていくためには、そのための環境がとても重要ですから）。

とはいえ、まだまだテーマを見つけることができていないという人も多いかと思えます。“ニュースを見る”、“新聞を読む”ということも大切なことですが、やはり勉強のきっかけは“興味ある授業への出席”でしょう。ということで、まずはどんな授業がある



のかを調べる必要がありますね。

こんなときはぜひ経済学部のホームページ (<http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp/econ/>) を訪問してみてください。現在経済学部のホームページからは、学部紹介、教員紹介、講義概要、これまで発行されたeconなど、様々な情報にアクセスすることが出来ます。経済学部のホームページを通じて皆さんの興味ある分野の講義をじっくり探してみてください。



## 講義内容は

興味ある授業に積極的に参加することは大学生生活の基本ですが、せっかく大学にいますから、次のステップとして、“実際に先生と話してみる”という方法を試してみてもどうでしょうか。でも実のところ、先生について知っていることは担当科目についてくらい、なんてことはありませんか？ そんなことでは研究テーマ探しどころか、ゼミ選びすらちよつと心配になってしまいますね。さてさて、どうしましょう？ こんなときもやっぱりホームページですよね。

トップページの“教員紹介”をクリックすると、経済学部在籍する教員の一覧が表示されます。ここからそれぞれの先生の研究や担当講義の内容を知ることが出来ます。また研究室まで質問に行く際、事前に連絡が必要な場合もメールアドレスなどはここで調べることが出来ます。



## 研究内容は

では研究内容を見てみましょう。ここには先生の研究内容、つまり現在関心を持っている事などがわかるわけです。担当講義名は知っていてもどんな研究をしているかは知らないことが多いのではないのでしょうか？ また先生によっては個人のHPを開設している場合もあります。皆さんの知らない一面を知ることが出来るかも。ぜひゼミ選びなどの参考にしてみてください。



# フィールドワークを語る

経済学部は、学生にとってよく「つぶしが利く」と言われますが、逆に、何を学べばよいのか必ずしも明確でない面があります。地域経済学科では、具体的に調査活動を行い、様々なものを見聞きすることで社会科学に対する学生の関心を高めよう、と地域研修という科目を設けました。今日は、その調査活動・フィールドワークについて経験豊富な木村保茂先生、水野谷武志先生、川村雅則先生に語ってもらいます。

司会：まず、各先生方から、それぞれの調査の経験、その面白さや課題、について聞かせてください。

## 出発点はトラックに同乗しての調査

川村：私は指導教官が医学博士だったこともあり、医師と共同で深夜運行に従事するトラック運転手の労働負担を調査したのが最初の経験でした。昼夜逆転で働く運転手の生理的リズムは、通常と比べどうなっているのかを調べたわけです。

北海道と東京間を運行しているトラック4泊5日の行程に同乗して、観察や測定を行いました。トラック輸送というのはトンベースでわが国の貨物輸送の90%、トンキロベースでも50%以上のシェアを占めているのですが、その担い手たる運転手の労働の実態はあまり知られていません。そういう労働負担調査から入ってゆき、その後は、対象を自動車運送業全体にひろげ、労働者調査だけでなく、そういうしんどい労働の背景にある中小企業の経営の問題や、トラックでいえば荷主との間の契約の不利から生ずる問題などを調べています。

もう一つの大きな経験は、旧産炭地での炭鉱離職者調査に参加したことでした。旧産炭地にはかつて炭鉱企業で働いていた多くのひとたちがそこに住み続け、高齢化してきているのですが、彼らの中には長く炭鉱労働に従事したことで、「じん肺症」という肺の疾患を疑わせるような呼吸器系の症状が多かったのです。そうした埋もれた事実を地元住民、患者団体や研究者、医師で構成された研究委員会で明らかにしてきました。

## 統計という武器で事実に向かう

水野谷：大学院時代の指導教官が統計学専門だったので、統計を用いて労働問題、とりわけ長時間労働問題にアプローチしてきました。それも、日本の統計だけでなく、国際比較を行うのがゼミの至上命題だったので、諸外国の統計も用いてきました。

よくいわれていたことは、統計は全体像、というか全体の傾向を示してはいるが、逆に個々の部分は分からないというが、平均化されてはやけてしまっている。そこでその部分に焦点をあてた

調査も独自で行わなければならない。例えば、東京の世田谷区で1975年から5年ごとに行われている生活時間調査というのがあるのですが、私はその調査に大学院時代に参加するという機会に恵まれました。この調査に協力してくれた世帯は、夫がフルタイムで働いていて、妻がフルタイムかパートあるいは無職のペアです。この三つのグループごとに一定のサンプルを集め、生活時間を尋ねるわけです。日本ではNHKが5年毎に生活時間調査を行っており、その歴史も戦前から長い。また総務庁（省）も76年から行っている。これらの調査と我々の調査の違いは、生活時間を個人単位でなく世帯単位に注目して把握しようとしていることです。つまり、生活時間は個人で決まる側面も当然にあります。サンプル数によって規定される側面も強いわけです。サンプル数は少ないですが、わが国でも非常に特殊なこの調査によって、そのことを明らかにすることができたと思います。もちろんそのデータがどれだけ全体を代表しているかの検討は必要であり、対象者だけの結果という解釈に過ぎないのか、それともそこから何か一般的な傾向を読み取り得るのか、そのあたりの難しい問題はあります。

今日、経済の大きな変動が進む中で、政府統計を中心とする統計は現実を必ずしもとらえきれない、そこに挑戦していきたいと思っています。

## 事実の重層的な把握を

木村：私は院生時代に自分の研究の方向性が大きく決まったと思っています。1960年代になりますが、修士論文では建設職人の研究を行い、親方や職人など多くのひとから話を聞きました。在籍していたのは教育学部でしたが、師匠が労働問題の研究者で、社会政策学会のそうそうたるメンバーが学部にはいました。その意味では、調査というのは私の研究歴の最初から何の抵抗もなく入ってきました。調査を行うのは当たり前だったのです。その建設職人の研究からはじまり、ゼネコンや下請の調査という重層的な構造の把握へと展開していきました。

それからもう一つは、研究室で鉄鋼調査を行いました。これが決定的に自分の研究に影響を与えました。というのは、当時の指導教官の方針が、鉄鋼労働問題をトータルなかたちで把握するた



# 小樽市中心市街地活性化の実態から学ぶ

昨年度開設した地域経済学科では、「地域研修」という科目が設けられ、実際に様々な地域を直接訪問し、街づくりや地域づくりなどを実態から学べる機会が提供されるようになりました。

## TMO(Town Management Organization)って何

この夏に地域の企業や街づくりについて学習している山田ゼミの取り組みについて紹介します。

山田ゼミは、毎年実際に都市を訪問し、その街づくりの実態についての見学・調査を行っています。昨年・一昨年は函館市でしたが、今年は、マイカルの進出・撤退で大きく変化しつつある小樽市中心街の街づくりについて地域調査を行いました。現場の行政担当者から街づくり組織の取り組みについての話を聞き、そして、直接商店を訪ねることで、学生も様々な思い・考えを持つことができました。

小樽市は、歴史と観光の街として、かつては北海道内で札幌と肩を並べる風格を備えた街です。しかし、戦後は昭和三十九年の20万人をピークに現在は14万人台と人口の減少に歯止めがかからないという状況です。産業は、港湾と観光を中心としてその関連産業が立地し、年間800万もの観光客が訪れます。また、高齢化が進む中、高齢者が住みやすい街にすることも視野に入れた街づくりが求められており、「全市民挙げてホスピタリティの向上と地域コミュニティの形成を図ること」を1つの目標に掲げています。

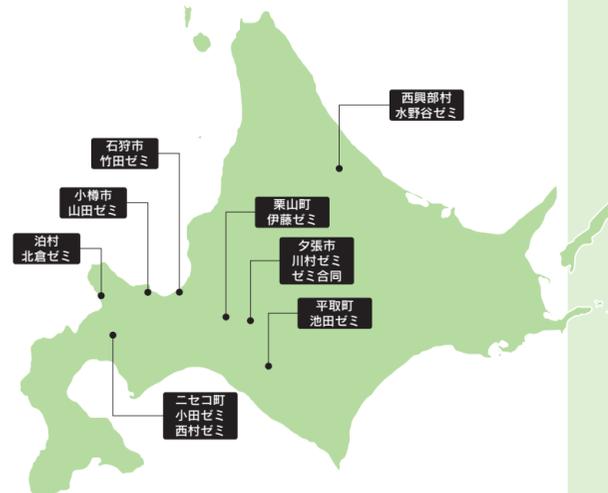
ゼミでは、街づくりを直接推進する組織として、それを管理・運営するため設けられた小樽タウンマネージメントTMO (Town Management Organization) を訪問し、これまでの取り組みや課題について話を聞きました。そしてその街づくりが対象としている地域の商店街の各店舗、歩行者から街について、そこにいる人々の意識や将来への様々な思いについて簡単な調査を行いました。

## 活気ある街にするため人と人から学ぶこと

小樽市にとって、中心商店街は買物だけの空間ではなく観光の目玉でもあり、また生活の場でもあります。しかも、最近は、マイカル小樽の進出と撤退、モータリゼーションの普及に伴って、空洞化のような現象が生じていました。そこで、中心市街地はどうあるべきか、そしてそれを誰が担うのか、ということから、街を経営する小樽タウンマネー



▲小樽市内商店街で調査活動



▲道内各地で取り組まれた地域研修

ントが創設されました。小樽市では商工会議所が一つの中心となってタウンマネージメントを担うことになっています。行政、商店街の振興組合、個々のお店などの間で、その軸になることが期待されています。そうした三者の関係から生ずる仕事のむずかしさ、を直接聞き、そしてお店のご主人たちの意見も聞くと、実際の街づくりのまとまりをつくる難しさがよくわかります。それは、各商店主によっても意識が違い、創業百年を超えるお店の方の話を伺ったり、熱心に商店街振興組合の役割を担っておられる方と出会ったり、街全体のことでお店の経営でご苦労されている話など、様々な経験を聞きながら、学生もいろいろな印象・意見を持つようになります。色々異なる考え・立場がある中で、どうそれを街づくりとしてまとめているのかは、本当に難しいことなんだ、と肌で感じるようになります。

## 全道に展開する地域研修で『人材の方舟』を

小樽市はかつて、運河保存をめぐる大きな街づくりの運動の波が起り、そのうねりや力はまだ残っています。その力をどのように発揮するのか、実際に現場の空気を知ることで理解できるのです。

こんにち、生き生きとした地域をつくるには、人材・担い手の育成は決定的に重要であり、「人材の蓄積を図り、併せて人材育成の拠点『人材の方舟』を創出することも必要」と小樽市のホームページにあるとおり、実際に地域がかかえている問題を知ることは、人づくり地域づくりにもつながります。

上の地図は、今年度、経済学部で実施された地域研修の訪問先です。今後も、こうした活動から道内の地域づくり・街づくりの担い手が育つことを経済学部はめざしています。

で中途半端な付き合いはできない、どうすれば地域の直面している問題の解決に貢献することができるかという、いさか分不相応かもしれませんがそういう思いを強くしました。

以前に交通事故被害者・遺族の講演会に学生と参加したことがあるのですが、講演を聞いた学生の感想文を読んでいると、とても学生にとってインパクトがあったようで、

様々な社会に存在する問題を知らないだけで、実際は学生に「受ける皿」はあるんだな、ということを感じました。その意味でも、学生には地域研修で様々な生の現実にくれてもらいたいです。

## 現実社会との格闘を

川村：私自身も、調査活動の中で、もっと頑張らなければという気持ちにいつもさせられる。とくに今日の経済政策の大きな流れである、構造改革・規制改革の中で勤労者や中小企業経営者がしんどい状況を強いられているわけですが、私は、ごくごく小さな実証研究をベースにそうした政策の批判的な検討を試みています。それがどの程度成功しているかは自信がないが、少なくとも、実態を無視した政策の展開に対して一石を投じてはいると思います。

私の場合、性格的に無用に熱くなっていることも多いですが、そうした熱い思いは調査・研究のベースになると思うし、学生にも、社会と切り結ぶ中で自分探しというものを、そして他者と交わる中で追い求めて欲しい。今回、ゼミの学生と失業者調査をハローワーク前で実践しました。失業問題をリアルなかたちで知ることモチベーションを高め、その後の学びを展開してもらいたいと思います。

司会：今回開講した地域研修だけでなく、ゼミで調査活動を展開している先生は本学には多くいます。そういう経験を集め豊富化する中で、学生の学びも充実してくると思います。こうした取り組みをますます強めていく必要があるようですね。



▲左から川村雅則先生、水野谷武志先生、木村保茂先生



▼▶運転手の状況を細かく記録



調査の魅力など、先ほどのお話にもあった、ナマの現実に迫り直接ひとにふれながら調べる意義は何なのでしょう、お聞かせ下さい。

## 調査によって元気をもらう

木村：これは不思議な現象なのですが、調査をすると非常に元気づけられます。今思い起こすと、院生時代に鉄鋼調査を行ったときなど、「ああもう俺は数年後には死んでもいいかなって」(笑)、そう思ったぐらい充実していました。'90年代からあらためて労働者調査を展開していますが、彼らの生活というか、生き様というか、そういうのを見聞きしていたら、やらなくては、という、そういう意味で力を与えられますね。

私がいま構想しているのは、学生に自分でテーマを設定させて資料収集、調査活動を経験させ、論文を作成させるというものです。前任教での卒業論文の作成もそうでしたが、こういうプロセスというのは、学生にとって一番力がつく機会になると思います。夏休みに調査をさせて、そこで得られたデータで既存の考え方を検証したり文章を書かせる。教員にとっては、学生につきあうのはもちろんしんどい仕事になりますが是非やってみたいですね。

## 学生にインパクトのある豊富なデータを

水野谷：私は先日、地域研修の依頼と事前調査を兼ねて道内の過疎地を訪問してきたところです。私自身北海道がはじめてで、しかも札幌しか知らないわけですから、やはり過疎地を訪れること自体で非常にインパクトを受けました。役場のひとにお話を聞いたり地元の方にお世話になることで、大学に身をおくものとし

ることができたと感じています。

## 浮き彫りになる個々の生活とその変化

水野谷：川村さんの調査方法ともかかわってきますが、生活時間調査では、生活時間というプライバシーにかかわることを24時間分根掘り葉掘り質問せざるを得ないわけで、事実を明らかにしたいという研究者の思いとプライバシーの問題の兼ね合いはなかなか難しいものがあります。

それから、1日24時間分の記録をしてもらうわけですから、協力者の負担という問題があります。そのため我々の調査では、どうやって協力者を見つけるのがポイントになってきて、選挙人名簿から無作為抽出で行っている調査もありますが調査拒否されるのは明らかなので、協力者を公募する方法で行いました。そういう意味では代表性の確保の点でいろいろ評価はあるでしょう。

ただ調査の面白さという点と重なりますが、調査を実施する前には、統計の数値で全体の平均的な姿ではおぼろげにしか見えなかったものが、実際に調査を行ってみて、協力者が記録したナマのデータを個票でみることができると。しかもそれを夫と妻とでつぎあわせてみる。そうすると様々な特徴がみえてきて非常に興味深いものがあります。また一部の夫妻は5年ごとに継続して調査してきていますから、現在と過去の比較も可能なわけで、実際に比較してみるといろいろな変化が確認されます。とても貴重なデータだと思えます。

## 実証研究の前提としての理論研究

木村：実証研究をしている者は、どうやってそれを理論化するかは絶えず考えなくてはならないと思います。とくに若いときは、社会科学の古典を読んだりして得た知識を、自分の調査対象、例えば私の場合建設産業ですが、建設産業ではどうあてはまるのか、あるいは既存の理論をアレンジする必要があるのだろうか、等々を考えます。

これは先達の言葉ですが、実証研究というのは大理論をベースにはしているがそのうちのごく一部を扱っている過ぎないわけです。例えば日本資本主義分析をベースとするならば、我々が対象としているのはごくわずかな部分に過ぎないわけです。そういう意味では我々が実証研究を行うときは、大理論のなかの小理論をどうやって実証的に豊富化したり修正したりするのか、若い頃からそう考えて研究をしてきました。よって実証研究をするものは、必ず理論研究を前提として行っておかなければならないと思います。

また調査の困難ということについて、30年前に比べると調査は大変になった、と如実に感じます。昔は、調査の依頼ひとつとってもかなり雑というか今のようには緻密ではなかった。昔は飛び込み調査というような感じでもOKしてもらえた。今だったら相手にしてくれない(笑)。

司会：いまは、調査方法のテキストなどでは、いかに客観的な回答を引き出すかなど、より正確な方法を競っているようにみえます。でも、日常的な会話の中からも、広い意味で学べるような面もあるようですね。さて最後に、学生に対する調査のススメ、というか、

めには、本工だけを対象にすればいいのではなく、系列も下請も対象にし、鉄鋼全体を構成している労働力編成を重層的に調べなければいけないという方針でした。ですから、製鉄所、系列企業、社外企業を対象にして、企業調査だけでなく、労働者調査もそれぞれに対応して行いました。幸いにも私は社外工調査を企画段階から任せられました。

こうした経験を院生時代にできたのは貴重なことで、私は'90年代からあらためて鉄鋼調査を共同で行っていますが、30年前の院生時代の経験が役立っています。それからもう一つは、鉄鋼だけでなく自動車とか電機とか、そういう分野を対象をひろげ、教育訓練・人材育成に関する調査を行っています。とくに社立学校をもっているところを総なめに歩いてきました。

司会：それぞれいろいろな経験をされていますが、では、調査の方法論なども含め、これまでの経験で面白かったことや調査の意義、それから悩みなどもあれば話してもらいたいのですが。

## 影の部分にも光を

川村：一番インパクトに残っているのは、大手運送業者から宅配の仕事を受注して働いている軽貨物の自営業者の調査です。対象者の自宅に一週間泊まりこみ、仕事と生活の全てに付き合いま

した。彼らは、元請である運送業者の指示で仕事をしているようなものなのですが、法律上は自営業者であるため労働者としての保護は受けられない。繁忙期だったこともあり調査の期間は一日14、15時間の就業でした。この宅配便というのは、それまでは派生的なものであった貨物輸送を運送業者自身がつくることに成功した革命的な商品と言われています。そして、それを可能にしたのはITをはじめとする技術や機械装置なのだ。

しかし、宅配便を低コストで支えるのに、実はそういう軽貨物のひとたちをはじめとする「しんどい労働」がある、そのことはとりあげられていない。同じことはコンビニ配送にもいえる。POSシステムなど情報技術は評価されるが、24時間配送を支えている運転手の実態、1店舗あたり数分で荷物をおろしていくその過密な労働や昼夜逆転の生活はとりあげられない。我々の豊かな生活を光とするならば、調査ではその影の部分の一定程度明らかに



▲同乗取材調査7つ道具